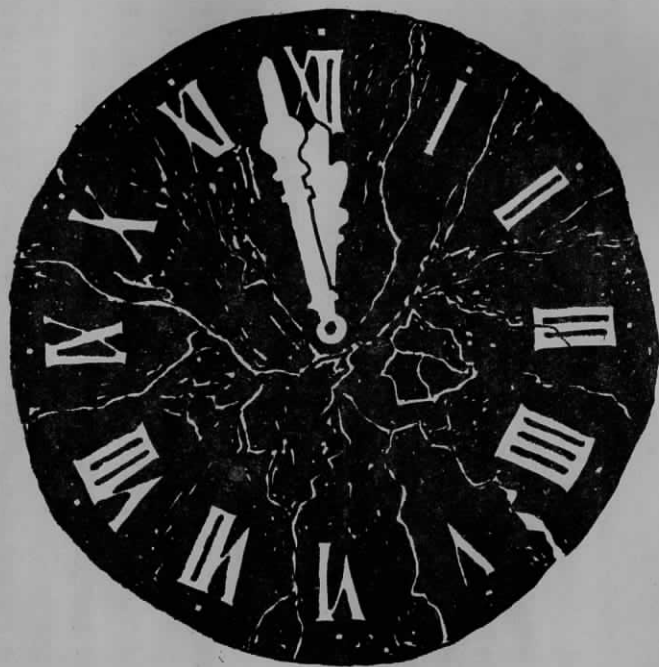


昭和47年9月15日発行・第34号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

リベルテール

9月号



Libertaire VoL.Ⅲ.No10

無政府主義者の機関紙

『十五
年九月
月』

四日第三種郵便物認可
「日」

定価一〇〇

（税別）

目次

アナキスト連盟と九州地協	杉藤二郎	1
戦後の思い出 141		
マックス・スティルネルの復権	大平智円	6
自然と人間	島哲平	8
書き洩らされたアナキズム運動史	横倉辰次	10
大杉、ベルグソン、サンジカリズム	はしもとよしはる	12
野火		16

アナキスト連盟と九州地協

(戦後の思い出 141)

杉藤 二郎

前に書いた首相官邸よりの帰途、九州行の急行列車内で、大声を発し、平民新聞を売り歩いている、佐賀出身の副島と逢う。当時、副島は福岡市に出て、小副川善吾と共に博多人形を造るかたわら、月に一・二度上京しては、中央と連絡を取っていた。その往復は新聞売りである。新聞を売ることが、戦時中バラバラになった同志の結集を図り、アナ連健在を世にしらしめる手段であった。そればかりではない。新聞の売上げは旅費の足しともなった。当時、紙に不自由していた国民は、新聞紙にも飛びついた。副島の話によると『新聞の内容はどうしてもよい紙がほしいと、幾枚も求める者があったが、そういう人間には一部も売らなかった。』そうだ。

平民新聞は、戦前の発刊実績により、紙も充分に配給され、最初の一年位は、配給の一部を横流しすることで印刷費が出たという。戦後の平民新聞は、一九四六年(昭和二十一年)六月十五日、近藤憲二を編集発行人として第一号を発行した。一部三〇銭であった。紙代は一九四七年五月二十一日付二十七号では五〇銭となり七月十六

日付三十三号では一円となった。しかし私が副島から買った八月十五日付三十六・七合併号は特別に二円五十銭であった。参考までに紙代の変遷を別表に掲げる。私は車中で出合った副島を、数日後に訪れた。そこには、井原・小副川の両君も居合わせて、急速に、地協結成の話が進み、運動の手始めとして、九州全土の平民新聞購読者を足がかりに、各地で講演会を開くことになった。副島・井原達は、佐賀、福岡で鞍打・真木・小山達に渡りをつけ、私は炭坑地帯を飛びまわり、北九州の日炭高松坑で向野を見つけ、宮田町貝島大の浦坑では居初、直方市で亀石ますぐり(女性同志)に連絡ができた。

亀石ますぐりは、当時地元で未亡人会を結成し、婦人解放運動に専念していた。後日、副島に彼女を引合せた際、副島は、あれは昔の同志、北村漢の女房だった人で見おぼえがあると、ひそかに私に語った。彼女は現在、市会議員として活躍している。

さて、一九四七年から四八年にかけて、毎月のように各地で講演会を開き、九州地協の基礎も固まった。メン

平民新聞定価及郵送料の推移

1946	6月15日	第1号	1部	30銭	送料	5銭
1947	5月21日	27号	"	50銭	"	15銭
"	7月16日	33号	"	1円	"	15銭
"	10月17日	45号	"	1円50銭	"	15銭
1948	7月12日	80号	"	2円50銭	"	15銭
1949	3月14日	111号	"	5円	"	50銭
"	7月18日	126号	"	5円	"	80銭
1950	6月10日	143号	"	10円(岡山、高畑)	"	80銭
1950	11月	(広島・栗原デ2回発行)			10円	" 80銭

た異様な姿であった。この部落は、左となりは共産党、右は菊旗会(右翼)という隣接地を持つ中央の、戸数約七十戸の一寸した農村部落である。私達の宣伝が効いたのか隣り部落のボルや菊旗会の連中も入場し、ヤジを飛ばしたりしたが、私達弁士の威圧に恐れをなしたのか、途中から、それらしき者は退散してしまった。それ程私達は、熱意をもって反国家、反権力を堂々と主張した。

この年は、恩師大山都夫先生の帰還、炭労結成準備集会、炭坑賃金のプール制実施問題等々、私個人にとっても多事繁忙な明け暮れで、上京も再々であった。上京の折は、芝、愛宕警察署前にあった工業会館ビル内のアナキスト連盟事務所へ、顔を出したのだが、或る時、私はこんなことで腹を立てた事がある。東京在住のアナキスト仲間も、さぞかし食糧に困っていることだろうと思ふ、仲間に別けてやろうと、炭坑を出発する時持てるだけの食糧を持って事務所を訪れた。事務所は二階に有った。その階段途中で、ブラカードを身につけた(サンドイッチマン姿)の岩佐老人と逢う。老人は私と握手し、年寄には新聞売りが適役さ、などと冗談を飛ばしながら元気に街へ出て行った。私は事務所の扉を開けて中に入ったが、そこには一人の男(後日、遠藤斌とわかる)が机に向って、ひたむきに書きものをしており、私の挨拶

パーは、
△福岡＝副島辰巳、小副川善吾、青木弘、真子(大杉栄の娘)、狹田、
△久留米＝鞍打辰雄、真木応瑞、堀場菊松、
△佐賀＝井原中太、井原末九郎、小山一弥、
△筑豊＝杉藤二郎、居染初蔵、向野青年、亀石ますぐり、河内、その他青年グループ(御幡、池田、藤川、末次、鶴)達、
他にも鹿児島、宮崎、大分、佐賀、長崎、と各地方に同志は散在して居たが、遠方の者は常時、会合に出席できず、福岡周辺の十数人を主体に、毎月一、二回集り討論し、行動をしていた。主として講演会を開き、無政府主義を論じた。地域によって演題を変えることもあったが副島は主としてアナルコ・サンジカリズムについて、井原は四次元の世界、杉藤は労働者の解放問題等。私は勤務の都合もあって、佐賀県と福岡県の運動に主として参加したが、中でも、八女郡の北田形という農村は、主催が公民館とあって聴衆も多く平民新聞もよく売れた。当時、青年行動隊と名付けていた青年達を先頭に、私達演壇に立つ者も、皆一様に身体の前後に(サンドウィッチ様式)思い思いの文句を書いた厚紙で作った物を首からブラ下げ、会場まで行進したものである。北田形の部落を沸したのも、こおし

に対して振り向きもしない。私はしゃくに障ったので、折角重い思いをして持って行った食糧を、そのまゝ持ち帰ってしまった。その頃、東京での会合の出席は、殆んど副島に一任した形で、私は連盟員の誰の家も知らなかった。副島という男も変り者で、我儘が強く、嫉妬心でもいのか、人と人との間を意識的にへだてるような処があった。また、私の知る範囲では大方のアナキストは、エゴイストである。私もまたその例にもれないと思ふ。九州地協の運営も最初二年位の間はうまくいったが連盟がサンジカリズム論争に端を発し、石川三四郎の死後、家の問題等、個人的な感情も混じえて、純正アナキズムを唱えるアナキストクラブと二つになってから、地協のメンバーにも分裂を生じた。

九州地方協議会は、毎月一回乃至二回の集会を開いていたが、その時には、各自能力に応じた負担がきめられていた。たとえば、炭坑で働く者は米や酒を、佐賀は魚類、博多は場所提供と資金を。然し回を重ねる間に、この約束ごととは守られなくなり、場所は支障のない限り廻り持ちということになった。地協の連中は、一升株の酒飲みが多く、会合の都度、酒は不足勝ちであったが、議論は盛んで隣近所の迷惑などおかまいなしの、徹夜の討論も辞さなかった。(地協の今後の活動、福佐新聞会、

無政府農園などについては、年次を追って記述する。）

学校と郵便局

私は、炭坑の休日は殆んど副島、井原達と行動を共にしたが、平日は組合業務に熱中していた。爆撃は免れたとはいふものの、炭坑地帯の生活環境は、都会人の到底考え及ばないもので、住居、教育、保健衛生、何一つを取ってみても、全く人間らしい生活ではない。私は入山以来この事が頭に上っていたので、労組長になったのを機会に、これらの改善について、賃金問題と共に会社側と交渉を重ね、労資の行うべき分野を取り決めた一種の協約を結んだ。小学校設立はその一つである。

当時、小学生はボタ山の周囲や田圃のアゼ道を、ハダシで二十分も歩いて、桂川小学校へ通っていた。小学校は役場の隣りに有り、桂川町の中央に位置する。勿論、この一校よりない。大人の足でも十五分はたつぷりかかる。また、道らしきものもない。雨の日や風の強い日など、学校を休む者が多く、いきおい学力は落ちる。また炭坑では雨具はおろか傘を持っている坑員家庭は少なかった。棟割長屋の納屋（ナヤ・坑夫の住居）から職場へ行くにも、傘などささないで、手拭を頭巾のせ小走りする。雨の日に雨合羽を身につけているのは、杭外棹取（サ

オトリ・運搬夫）だけである。傘がポツポツ坑員家庭に持たれるようになったのは、賃金の上昇を見た一九四八年頃からである。坑員家庭はそれほど食生活に追われていた。さて、小学校の話だが、初めは低学年だけでも鉱業所内で教え度いと、会社や学校長に話を持ち込んだが言を左右にできなかった。仕方ないので、いさゝか権力行使ではあったが非常手段に出て、ほとんど一晩のうちに協和会館の一部を間仕切りして、三教室を造り、労務職員で元訓導をしていたことのある連中と図り、一・二・三学年の男女共学をはじめた。

この学習は三ヶ月位つづいた。この思い切った行為が父兄の賛同を呼び、山のボス達や前組合長も協力してくれるようになり、会社、学校、役場、教育委員会とそれぞれ手別けして説得に当った結果、遂に鉱業所内の丘陵を整地して、桂川小学校の分校が建つことになった。整地には、父兄は勿論、婦人会、青年団、一般の人達も勤勞奉仕に参加したので、以外に早く学校は出来上り、この分校は、三年経たぬうちに、独立した吉隈小学校となり現在に至っている。この頃の炭坑が如何に非教育的な地区であったかを示す一つの例として、協和会館に於ける授業の思い出をあげてみよう。

教師の陣容の整わない最初のうち、私も週三時間の授

業を受持っていたが、一番はじめに私は子供達に問うてみた。

「今、日本で一番大切な物で、白いものと黒いものがある。それは何でしょう？」

「黒いものは石炭、白いものはかあちゃん。」

「なぜ、かあさんが白いのか？」

「顔中、おしろいベタベタで、お父さん待つとるバイ。」

黒い物は石炭とは、流石に山どころ、我が意を得た答だが、白いものは当然、米とあるべき答を予想していたにわか教師は、子供の答に驚いた。白い大切なものを米と言えろ程子供は米飯を食べてはいなかった。それに、顔中おしろいベタベタは、戦争後家の実態なのであった。炭坑で戦争ゴケと呼ばれる女達、戦死者の未亡人はもとより、夫を戦争に取られて、何時帰るとも、生死のほどもわからず、生活に追われている女達は、安い賃金で骨身を惜しまず働いてはいたが、心身の飢を満すために、化粧に浮身をやつし、男を求めていた。子供たちはその事情を、敏感に受とめていたわけである。

さて、学校の他に、鉱、職員の福利厚生施設として、炭坑の古い納屋を会社から借りて改装し、洗濯屋、パーマント、理髪店、時計屋などの店舗も造り、夫々の専門家を入居させた。その他、労組内に生活協同組合のよ

うなものを作って、労組とは別の組織で、安い物資を斡旋した。これ等の福利厚生事業は、労組の活動として当然のこと、今日では受取られる事だろうが、当時ではまだ珍しがられ、各地の事業場から、見学や視察に来る人が相つぎ、講演にも度々引っぱり出されたものである。不便な山の中の炭坑だから、炭坑構内に郵便局を設置するのも、住民にとっては、長い間の要望であったが、私も早急に実現させたいと行動を開始した。先ず青写真を用意し、再々熊本の本郵政監督局へ陳情に出向いたが、一向に進展しない。事情は、桂川、碓井両郵便局長の猛烈な反対運動があり、阻まれたのである。小さい田舎町の郵便局が、人口の密集した炭坑地区を失うのだから、必死になることは止むを得ないが、労組内部に、彼等の暗躍にのせられた者があったことは、私自身の不徳の致すところであったとはいえ、大きなマイナスとなった。しかし、この問題も時が解決し、二年後に郵便局は設置され、灰田藤吉氏（私の入山当時の栄寮々長で元職業軍人）が、会社のお声がかかりで、初代の局長になった。

斗いの更なる深下に向って、刃は磨ぎすまされねばならない。斗いは今始まったのではない。斗いは過去から現在へ、そして未来へと永劫に渡って続けられる。それは、更なる斗いへの徹底した深下として押し進められねばならない。これを荷ない得るのは、純然たる個に解消される。社会的条件がどうだの、歴史的必然性だのという解釈は、自分の立脚している位置を明らかにし、それに加えて、ある鼓舞を振るい起せても、現実を我が身に引き受ける勇氣は、唯だ個人の反逆の精神に帰着されるからである。この時、私達はスティルネルの復権を見る事はできない。

一時期、スティルネルは時代を風靡したという。真下信一氏に言わせれば、彼の青春時代の座右の書だという訳である。又岩藤雪夫の「ガトフ・フセグダ」の中にも『そして大概の考えるマドロスは「老子」を読み、「マックス・スティルネル」に耽溺していた。』という文がある。これは日本に限った事ではない。一八四五年「唯一者とその所有」が出版された時ドイツではたちまちの間に伝播したという。そしてマルクスをしてドイツ、イ

デオロギーの中で、あの膨大なる量の執筆をさせたのは驚くばかりである。ほとんどその内容が誹謗と中傷で満ち満ちた書である。そして今でもイギリスでは印刷工をして彼の読合せが続き、egoist 同盟がある。日本でもかつて「自我人同盟」があったが。

にもかかわらず、スティルネル旋風が、何を生み出したか、これを語らぬ限り、そしてこれを問題にせぬ限り彼の復権はおぼつかない。果して旋風が旋風でしかなかったのか。昭和の初期、青年の座右の書とまでいわれた彼が青春の記念碑として過去に忘れられるまでのことであつたのか。

古典は何度も歴史に登場して来る。とりわけ、類似した歴史状況の中でフェニックスの如く、その度に新しい内容を付与され、見直され、その真価が問われる。その点に於いてはスティルネルもその類として顧みることができよう。しかし、それにしても彼の研究に手掛ける時彼に関する論文の又評論の絶対的量の少なさは、私をして驚かせる。全く一時期を風靡し、旋風の如く走り去り影も形も見せぬからである。

べるのだ。

彼の研究の対象とされる場所はニヒリズムの系列か、あるいはアナキズムの系列かである。一見ニヒリズムとアナキズムの共有する場は明らかのように、それを突きつめてゆけばその範囲は曖昧模糊として漠然として来る。それと同様に彼をどのゾーンの中に於いて研究対象とするかは彼のイメージを明確に浮かび上がらせるには決定的な事だと思われる。彼の著書「唯一者とその所有」が難解な書とされている様に、ニヒリズムの系列の中で把えるなら虚無主義者として映るだろうし（多く彼をその部類に閉じ込めている可能性が大きい）、アナキズムの系列の中で把えるならブルードンの個人主義者として映しだされるからである。これは、ニヒリズムが人間否定としてアナキズムが人間肯定として一考されるところ同様の事である。そして確かに彼はその辺の気分を万遍なくまき散らかしているのである。

彼の著作中に駆使される文章自体が徹底した否定を通して、反語的弁証法（西谷用語）を通して、何にも渴かれぬ自我を明らかにしていくと同時に、翻えり、自我が一切を自己享受の対象として、所有する行為に於いて自我が対象世界の中に躍動し始めるその所の事情である。

「私の事柄を、無の上に、私はすえた」

我々が現在手にしえるものは、松尾邦之助「スティルナーの思想と生涯」、西谷啓治「ニヒリズム」の中の「エゴイズムとしてのスティルナー」マルチン・ブーバー「単独者の問」John Henry Mackey「Max Stirner Sein Leben und Seine Werke」等がまず良いところである。スわんやマルクス主義者の中ではドイツ、イデオロギー「聖マックス」で事足りりとする風潮はいかんとしがたいところである。

このように絶対的量の少なさにも比して、彼は生き続ける。あたかも彼の研究、彼の思想の再生というところとは別個に、生きた人間の自我への渴望と、果しなき唯一者としての自己をかいま見る事、人間の、各個人の生命の息吹として復活するのである。

私は冷笑をもって、この事実を喜ぶ。学者諸君の研究対象としてスティルネルが復活するのではなく、把え難き程無名化された個人の中で、彼が復活する事である。逆説的に、旋風が旋風であり、現象的には何ものも生み出していないかの様な相を装いつつも、人間が自己という原点に立たされた時、生身の肉体をもった個人として関係を余儀なくとり結ばねばならぬ時、彼がそこに立っているということであり、それ故彼はまさしく実存として個人の中に虫ばんでいくことの不敵さに笑いを浮か

(mir geht nichts über mich!) という言葉は呪文のごとく私の脳裏に焼きつき離れない。私が無であるのか、私が一切であるのか。否定的契機、創造的契機としてそれが縦横に駆使される時、その意味の深さと困難さに逢着するのだ。そして、まさしくこのところが我々をしてスチルネルの復活を、それ故復権をかちとらせるか否かの問題と云うのは断言であらうか。

六〇年代というのは、良い意味でも悪い意味でも、ある極限状況を創り、今後の課題を全面的に我々に呈示した時代であった。ある者は絶望を見又ある者は希望を見る。労働者階級の死滅を見、労働者階級の復活を見たといっても良い。必死に闘い、たどりついた処がそれであったのである。そして、それを眺め、その中に埋没し、にもかかわらず、自分の足でこの地上に立っているし、たつ勇氣を欠除するならば一切が崩壊せざるを得ないという、強度の認識を新たな出発点として歩き始めねばなら

「自然と人間」

近頃ほど、公害が叫ばれ、人間環境が問題にされている

た時、とかく問題にされるのが西洋文明である。では西洋文明では、自然をどう把握しているのだろうか？

ペーコンは、人間はよりよく自然を認識(科学)することによって、自然をよりよく支配(技術)するといった。ここで明確なことは、自然とは人間から支配される存在であり、認識され利用される存在であった。又自然とは物質的世界であり、それは単に研究利用するだけのものとし、捉えられてなく、あくまで人間と対立し生産をあげる為の端的な利用手段でしかなかった。では人間と自然とは、どう違ふのだろうか、人間からみると人間の起源に関わりのないものは全て自然のものであるというが、私は人間もまた自然の一部であるといいたいのだ。自然は自己の内から人間を作り出し、自己の内のみしか存在しえない人間を作り出した。それ唯に自然が人間を超えることは、不可能であり超えようとすれば、自然からの手痛い反撃がなされる。ここで必要なのは自然を対峙物として見ることを否定し、自然を愛し自然と同一化することが必要なのだ。同化とは自然からの一方的強制でもなく人間の自然征服でもない。それは人間の精神に横溢する主體的な能動性を持った生の拡充なのである。だから自然と同化しえろし、愛することも出来る。この生の拡充そのものが、人間の自然性であらう。くだいよ

ない我々は、学問とか出世とかいう怪物を自分の中から一掃し、まさしく自分の足で、生身の体で確実に歩み始めねばならない時点で、改めて自己の運命というのを問題にせねばならぬ時期に来ていると思う。自立というのはこの事である。誰にも預けることも譲ることも出来ぬただ自ら引き受けることで歩む他ない自己に逢着した時人間とは何かと問われ、「自分だ」と答える時、自己の復権をかけて、それ故スチルネルの復権をもかけて、我々は歩き始める。

青春時代のハシカではない。いわんや風靡や旋風でもない。この事を時代の類似や傾向で一瞥できる程の客観主義者は学者か評論家である。彼らは害になっても益にはならない。人間を知っても個人を知らない部類である。やっと私は、出発点に舞いもどりつつも立つ事が出来た。そして、私はこれを書くことで再びここには来ないであらう。その為にも書かなければならない。飛躍する為の軌跡を跡付ける為に、私はここに立つのである。

島 哲 平

る時期は、かつて歴史上にあったのだろうか？ こういっ

うだが、自然は人間そのものであり人間は自然そのものである。現在より更に自然破壊を繰り返すならば、己自身の首を締める結果になるでしょう。この偉大なる大自然(大地・海・動物・植物等)を客観的な見解から主観的な見解へ、いうならば、「大自然の中へ人間を」である。種々の空間をいろいろ生命の存在を尊重し認識しなければならぬ。空間の分割はものの存在を規定するというが、この自己の存在している空間を他のいかなる人間であらうと、いかなる生命体であらうと、関与出来ないし占有することは、不可能である。では人間の精神面はどうであらうか、精神は一種の小宇宙であり自然なのである。そこでは個々の創造性主体性を持ちあわせている(生の拡充)。ゆえに誰をも占有は不可能である。だがその偉大なる自然の法則を無視し、人間は他人に隷従するものだという誤まった概念が、まかり通っている。それは自然を征服しようとする、西洋文明の認識と何ら違いない。自然のもつ、非占有、他の存在を尊重する認識が、今必要なのだ。特定のイデオロギーを奉ずる人間は、即時的には人類であっても、対時的には人間ではない。ここに我々が人間の自由独立(アナキズム)を叫ぶ所以がある。自然を征服しようとした時、公害という自然の帰り打ちにあらうが、人類をイデオロギー的に征服し

ようとした時は人間は隷属と幻想の中で、非人間の谷間へと転落して行く。ここで大事なのは、垢で汚れた自己の認識を捨象し、自然に生きることができ、真正正銘の

人間に帰ることが出来るのではなからうか。そうすれば、新たなエネルギーの暴発が繰り返され、公害なき、服従なき、自然との調和が現出するでしょう。 一九七二、三〇

書き洩らされたアナキズム運動史

横 倉 辰 次

私たちはメーデーにも参加しようとしたが、A O労働者連盟で申し込んだところが、これはメーデーにあてこんで組織された思想団体だという理由で却下された。翌年は、今度は黒色自由労働者組合で申し込み、許可されると無理して黒色自由労働者組合という黒地に赤文字の組合旗を作り、旗竿までは買えないので、青竹を買って来て、これにつけて意気揚々とメーデーに参加した。高樹寿之介が、コースの途中で待ち伏せしていて、ポリ公の眼を盗んで飛入りして「俺に持たせてくれ」と言って、喜々として黒旗をかざして歩いていった。その寿之介も今はな。

やがて、警察の弾圧が激しくなり、御大典を終期として一網打尽的な検挙の手が伸びた。これは黒連の連中よりもA O労働者連盟員の方が厳しく苛烈であった。

これを予期した我々は、四の橋の事務所をA O労働者

連盟員でなく、黒色自由労働者組合の比較的新人に托して、それぞれ部屋を求めて分散したり、ドヤ生活（木賃宿）に戻ったりしたが、ボツボツ発見された者の順に検束、拘留、豚箱入りをした（最低の者で二十九日以上であった。）

村上義博を中心に五・六名の者が、東中野に一軒を借りて、看板（A O労働者連盟）を出さず秘んでいたが、これも間もなく発見され、七・八名一遍に逮捕されて中野署の豚箱入りをした。この時、サーニン村上の鉄腕を知らず、単なる不良視して村上に平手打を呉れた署長は村上のライト・ストリートを喰って、椅子諸共、顎をはずすという一幕もあった。

私は、平見丸ボンと飯田町辺に部屋を借りていた。平見は、斉藤敏資の紹介で明治大学の食堂にシャリ炊の職人として就職して、日曜日は公休という厚遇で高給（？）

をほみ、一応生活が安定して嬉んでいた。勿論、プロとしてのシャリ炊ができるわけはなく、ゴチン飯を炊いてしまい、ライスカレーにして胡魔化したのが、ばれて、相撲部と柔道部の学生にドナリ込まれたりしたが、平見は「俺はアナキストだ」と名乗り、アナキズム論を一席ぶち、革命について論じて煙に巻いて、事なきをえた。それ以後、その学生たちと仲良くなり、自由連合新聞を売りつけたりして嬉んでいたが、月給日に彼が同僚に誘われて遊里に遊びにゆき、私は独りで寝ていると、未明に数名のデカに踏み込まれた。その内の特高のバイらしいのが、室内を見回して「おい、平見は、どうした、どこへ逃げた」と鋭くきいた。「知らんよ、別に逃げはせんよ」「では、何故おらんのだ」「用があれば外泊もするさ」「ふん、すると昨日は月給日だから女郎買にでも行ったのか」「ドロバイらしいのが卑猥な微笑を浮べてきた。その間に特高のバイが押入れにある雑誌「労働者」を百部余り発見して、急に猫撫で声を出して、「これを一

人共覚悟していたから別に驚かなかった。二度目の二十九日目がきても釈放されないうちでいた。御大典は、まだそれより十日余り後なのだから。

それに二人にとって不幸中の幸ともいうべきは、当時の麴町署は東京四十幾つある豚箱で一番食事のよい豚箱であったのだ、署の附近にはいわゆる「なわのれんの飯屋」も下級な三食弁当屋もなく、豚箱の弁当が、仕出しやから入れられていたのだ。

これに反して最悪なのは車坂署で、これは警察の小使が請負っていて、極悪な弁当であった、一晚検束で入って知っているが、麦飯の粗悪品であった。（つづく）

一部貰いますよ」と、ポケットにねじこみ、私は引立てられて早朝の町へ出て、麴町署に連行されて豚箱にホウリ込まれた。

一時間ほどすると、さい前の特高が豚箱の扉口へきて「お、山口、この「労働者」は発禁になってるんじゃない

アナキズム 11 特集「私のアナキズム」 一〇〇円

東京都新宿区東大久保1-4-64 松喜ビル

バルカン社 気付